

藤原宮大極殿基壇の測量調査

—第186次

1 はじめに

藤原宮大極殿院については、戦前の日本古文化研究所（以下、古文化研）の調査で、大極殿および大極殿院回廊の基本的な構造が把握され¹⁾、その後の奈文研による調査で実態の解明が進んでいる。とりわけ、古文化研が桁行7間、梁行4間とみた大極殿については、先行朱雀大路との位置関係から西に2間広い桁行9間とする復元案²⁾が有力視されている。しかしながら、大極殿基壇に対しては、これまで詳細な測量調査が実施されてきておらず、古文化研の成果と奈文研による調査成果とを詳細に擦りあわせるには限界もあった。加えて第186次調査では、大極殿南面階段とみられる遺構が検出され、同遺構と大極殿との位置関係の検討も課題として浮上した。

そこで調査期間中の2015年7月14日に、第186次調査検出の遺構面の記録と一体的に三次元レーザー測量を実施した。以下、その成果を報告するとともに、大極殿の規模や周辺の検出遺構との関係について考察する。

2 測量成果

図82は三次元測量により入手した点群データを陰影処理し、20cm等高線を発生させたものである。大極殿基壇の現状の高まりは、東西44m、南北32m、高さ1.2～1.5mを測る。一見すると基壇の残存状況は良好に見えるが、現存基壇の中心は藤原宮の中軸線よりも東側に6mほど逸れる。この点は、後述のように大極殿基壇の西面が後世に大きく開削を受けた結果によるものである。

南・東面にも後世の開削がおよんでおり、南面では西側ほど大きく削り込まれ、等高線は西へいくほど北に振れる。南面西側では、法面に円形を呈する窪みが4ヵ所存在し、図上ではそれが波状の等高線となって現れている。窪みの内部には拳大の河原石が大量に散見されるため、これらはかつて古文化研が検出した根石群、および礎石据付穴の一部とみて間違いはない。後述のように、大極殿南入側柱列にあたるものと理解できる。

一方、北面については、傾斜変換点が不明瞭であり、5度前後の傾斜で北向きに緩やかに下降する。後述のよ

うに、現状の北面裾は本来の基壇の出よりも9mほど北に寄っており、基壇上の土砂が北へ大きく掻き出された結果と推測される。

なお、基壇上の西北に根を張る檜の木には、鴨公神社の玉垣が巡る。花崗岩の方柱を笠石と地覆石で連結させた約3m四方の玉垣で、南東隅の親柱に「大正四年十一月十日」の銘が刻まれている。この玉垣は古文化研の報文中にも登場し、当時の位置を動いていないとみられる。

3 大極殿基壇の推定復元

以上の測量成果を踏まえて、大極殿基壇の本来の姿を推定復元する。戦前の古文化研による大宮土壇の調査では、上面の立木を縫うように設定された細長いトレンチにより22基の根石群を検出し、大極殿を桁行7間、梁行4間として復元した。報文巻末の図版中の「建築趾實測圖」および「發掘現場實測圖」には、その際、検出された根石の位置とトレンチの範囲、および前述の玉垣が明記されている。その玉垣を基準にして、古文化研が検出した根石列、およびトレンチのおおよその位置を今回の測量図中に重ねあわせた結果が図83である。

まず注目すべきは、前述の南面西側に露出する礎石据付穴に起因する窪みである。古文化研が検出した根石の位置とほぼ重複していることから、ここでの図の重ねあわせに大きな問題がないことが確認できる。

その上で、桁行9間、梁行4間とし、身舎の桁行を17尺等間、梁行18尺等間、廂を15尺とみる小澤毅による大極殿復元案³⁾を朱線で重ねてみた。その結果、小澤案は宮中軸線や古文化研検出の根石列と整合性をもって重なった。かつ、第186次調査で検出した階段痕跡SX11325は大極殿中央の柱間に、同SX11326も東から2間目に見事に対応することが判明した。未掘範囲の西から2間目に対応する位置にも階段が存在し、南面には全体で階段が3ヵ所取り付けのことは確実とみられる。同時に、南面と西面は、廂部分の1間が完全に削平され、現地表にはその痕跡をまったくとどめていないことも明確となった。

あらためて古文化研が作成した測量図を見直すと、大宮土壇の南側および西側には、北で東に軸を傾ける細長い区画が表現されている。報文は「土壇の南方には東西百五十六尺、南北二十尺許の細長い水田」が存在するこ

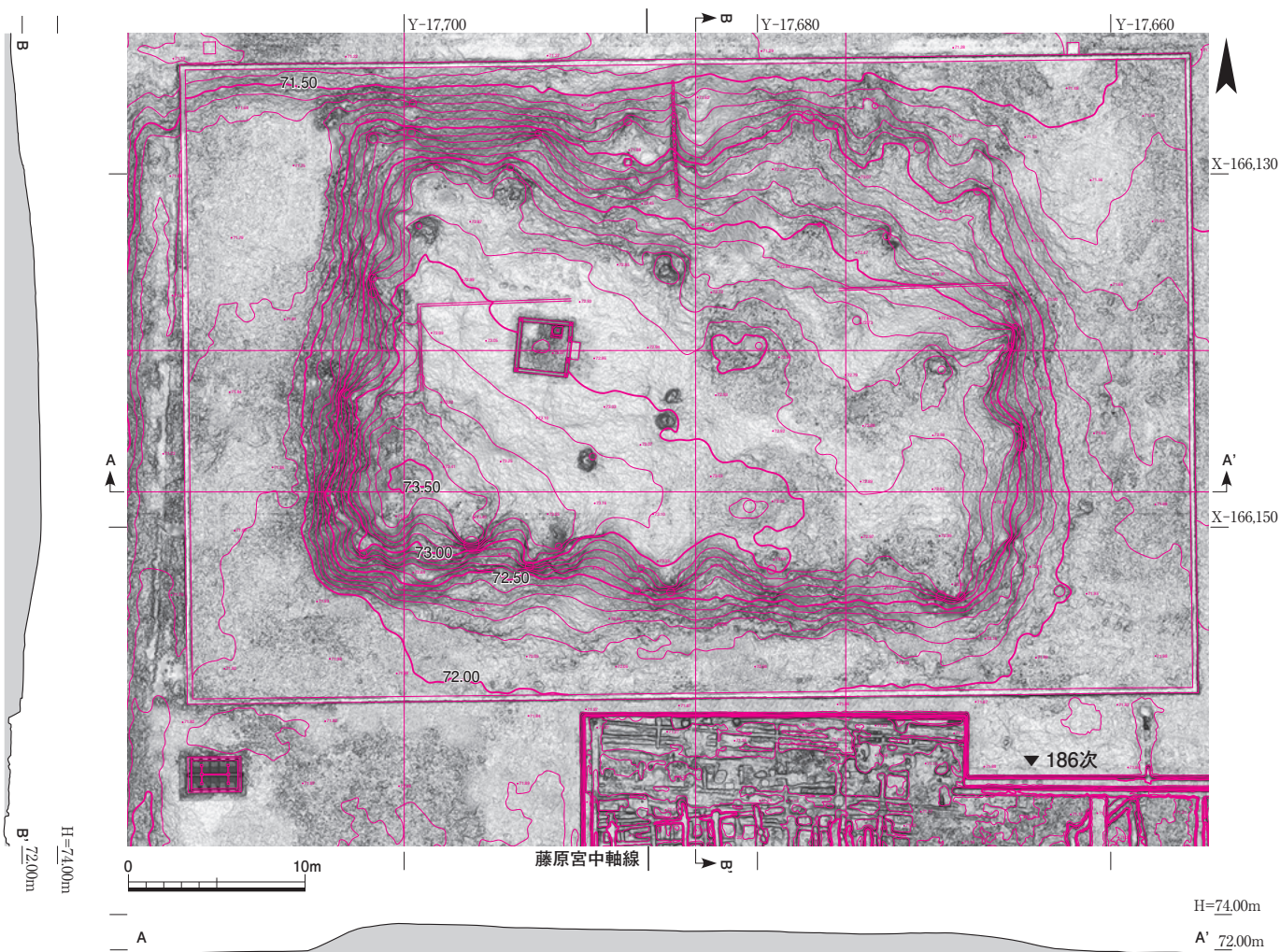


図82 藤原宮大極殿基壇の三次元陰影・等高線図 1:400

とを記しており、大極殿基壇の南・西面は後世の水田耕作により大規模に削平されたことが理解できる。

古文化研は、この南側の水田の形状に添って細長いトレンチを設定して「土壇栗石列第六列」の検出を試みたが、根石列は未確認に終わった。代わりに「小石と松香石破片」の集積を検出し、「松香石は恐らく基壇南側か或はその階段かに関係あるものであろう」との推論を得た。第186次調査区の北壁では、水田の床土を掘り込む溝状の落ち込みを確認したが、これが基壇南側の水田に添って古文化研が設けたトレンチにあたるとみられる。図83では同トレンチの東半が第186次調査区に完全に重なっているが、実際には同トレンチは北壁をかすめる程度にしか重複していない。図83上で完全に重複する結果となっているのは、おそらく基壇上面からの平板測量とみられる古文化研の測量誤差を反映したものと考えられる。

いずれにしても、第186次調査検出の階段痕跡SX11325・11326は、古文化研の調査でもその存在は認識されていたとみられる。松香石（二上山凝灰岩）とともに検出された小石は、第186次調査で検出した階段周囲の礫敷にあたるとみられる。ただし、古文化研のトレンチ調

査でも、大極殿基壇本体は未確認に終わったようであり、後世の水田耕作による削平の大きさがうかがわれる。基壇本体については、第186次調査区内には一切姿を現していない。SX11325・11326の検出長は3.3m前後であり、さらに北側の調査区外へと延びることは確実である。平城宮第一次大極殿の階段の出が4.2～4.4m前後であることを踏まえると、基壇南端ラインは186次調査区のすぐ北側を走るものと推測される。仮に階段の出を15尺（4.43m）、基壇の出を13尺（3.83m）とすると、大極殿側柱筋の推定位置からの距離と整合する。基壇の出がやや短い感もあるが、ここでは南面のあり方と同一規模で各面の基壇裾および階段の位置を復元、図示した。

なお古文化研の調査では、基壇北東側で長さ三尺七寸、幅一尺四寸、厚さ一尺一寸を測る方柱の切石を検出しており、報文は「階段用の石材の一つではないか」と推定する。報文巻末の図版中には同石材を示す方形のマークが明記されており、これを図83上に落としたところ、図らずとも北面東階段推定位置の踏面部分に載った。この石材が原位置を保っている保証はなく、今後の検証を要することはいうまでもないが、古文化研が検出

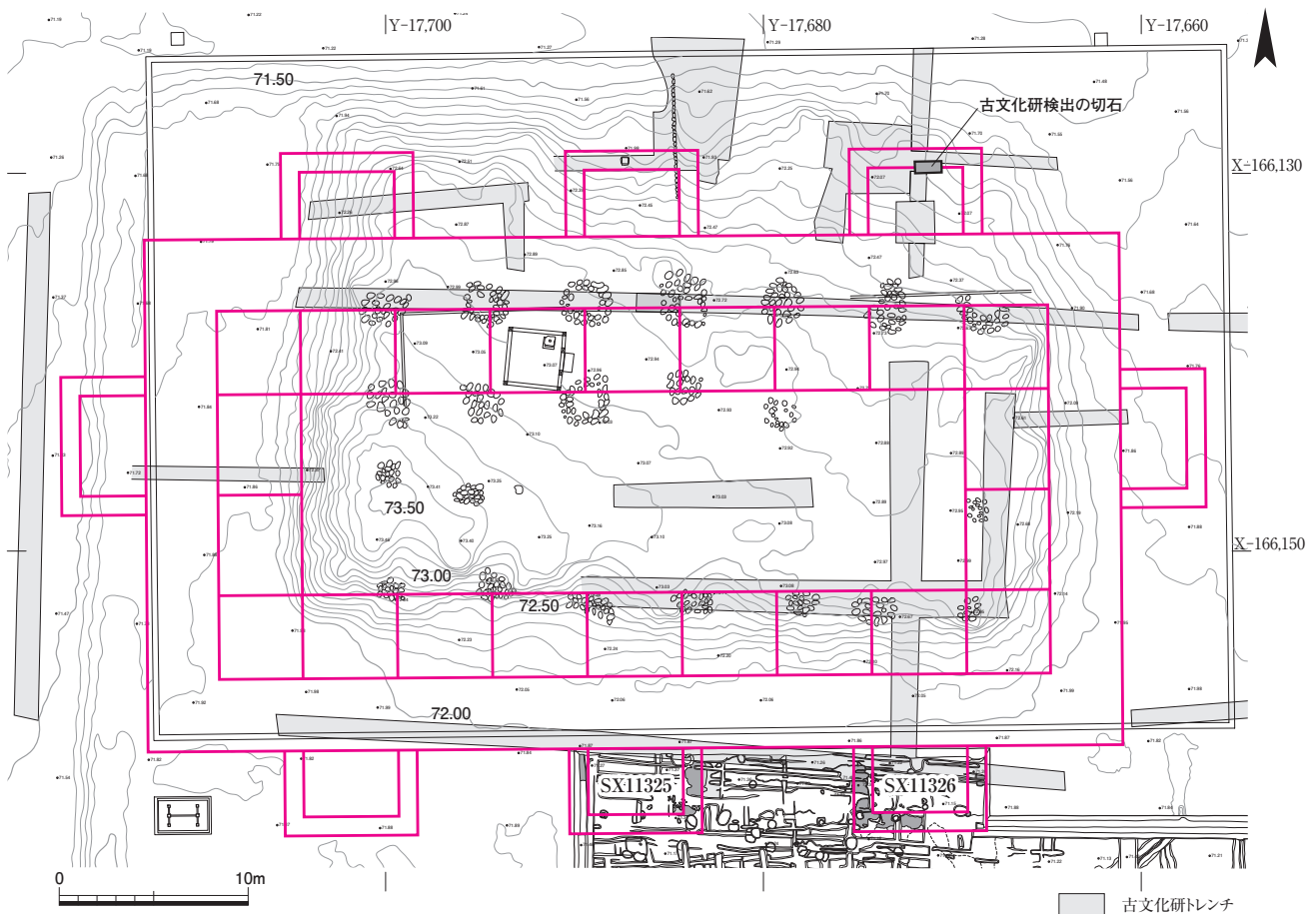


図83 藤原宮大極殿基壇の推定復元 1 : 400

した方柱状の切石は北面東階段の踏石の蓋然性が高く、同時にここまでの基壇の復元の妥当性を傍証する。

この階段踏石については、報文掲載の写真からは、さほど磨滅した様子がみられず硬質な印象を受ける。二上山凝灰岩特有の黒色の凝灰岩礫もみられないことから、竜山石の可能性が高い。第186次調査検出のSX11325・11326は二上山凝灰岩であったが、周辺には竜山石の破片が散乱しており、藤原宮大極殿の階段は、下部に二上山凝灰岩を使用し、踏石を含む上部の石材には竜山石を用いる構造であったものと推測される。こうした階段の配石方法は、基壇本体のそれを反映したものと目される。

なお、SX11325・11326については、63・64頁の事実報告でも述べたように、切石底部の残存幅は1.1m前後に達し、地覆石、延石のいずれとみても通常より幅広である。一般的に階段側面の地覆石は、対象となる殿舎の柱筋に石材の中心をあわせて設置される。ところが、SX11325・11326の場合、石材の心々ではなく内法が大極殿の柱間17尺に一致し、図83上でも石材内端ラインが大極殿の柱筋に揃う。おそらくその上に載る2段目の石材は、1段目の石材の内端ラインを軸線とし、外側半分を石材上に載せ、残りを内部の版築土上に迫り出すように設置されたのであろう。こうした石材の設置方法は、一般的な切石積基壇の構造に照らしあわせると、延石と

地覆石の関係とみるのが適当である。そう考えることで、地覆石の中心、およびその上に載る羽目石が大極殿の柱筋に揃うことになり、すべてを整合的に理解できる。

すなわち、藤原宮の大極殿基壇は延石を備えた壇正積基壇であった可能性が高い。ただし、そのようにみた場合でも、延石の幅が一般的なものより大きすぎる点、平城宮以降の大極殿基壇では延石の使用が確認できないなど、問題点も依然として残る。この点については、切石積基壇を備えた最初の大極殿の特殊性として評価できる可能性もあるが、現段階では仮説の域を出るものではなく、その当否は将来の検証に委ねることにしたい。

4 大極殿院の推定復元

次に、今回、推定復元した大極殿基壇を大極殿院全体の中に位置づける。まず、大極殿院南門では、北面階段の凝灰岩（竜山石）の一部や基壇外装の抜取溝から基壇規模があきらかとなっており、その中心の座標は、 $X = -166,219.80$ 、 $Y = -17,686.50$ 付近となる。これに対して、推定復元した大極殿基壇の中心は、 $X = -166,146.90$ 、 $Y = -17,686.85$ であり、南門心からの距離は72.90mを測る。これを小尺0.295mで換算すると247.1尺となる。大極殿心が推定値であることを踏まえると、大極殿と南門間は250尺を計画値とするとみてよからう⁴⁾。

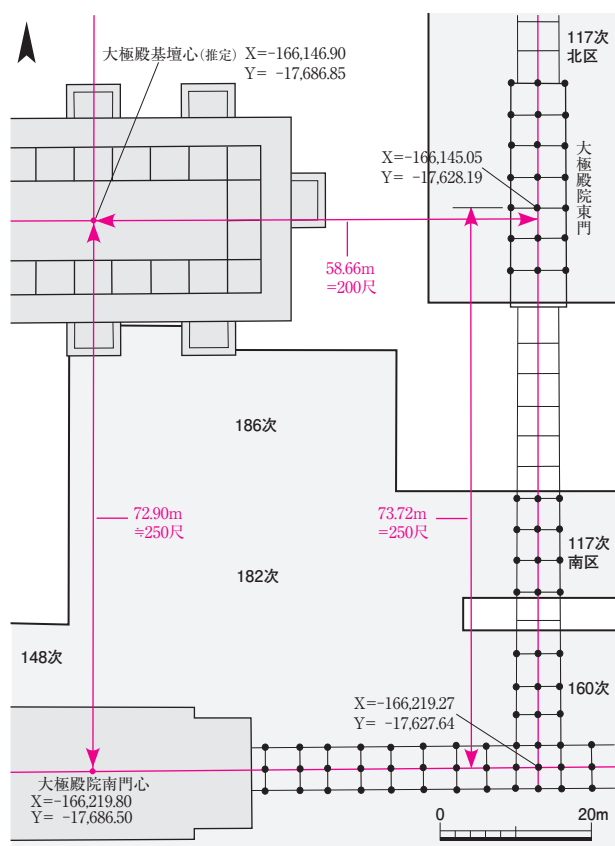


図84 推定大極殿基壇と大極殿院 1:1000

続いて大極殿院東門は、第117次調査の成果により、複廊の東面回廊（桁行14尺、梁行10尺）に取り付く、梁行のみ回廊より2尺ほど広い7間×2間の総柱建物とみられている（『紀要 2003』）。東門南端については、既査区外にあって未検出であるが、仮に9間とみる案は、門南端が大極殿南面階段よりも南に位置することになり、成立しがたい。第117次調査の所見通り桁行7間とみておくのが無難であろう。その場合、東門南端の柱筋は大極殿基壇南面の出よりも北寄りに位置することになる。

一方、東門北端は、その柱筋を大極殿北面階段の北端付近に置くことから、東門は北寄せで設置されたものと推測される。上述のように、東門を7間とみた場合、東門中央の柱間は大極殿梁行の北から2間目に対応することになる。平城宮以降の大極殿では、東・西面階段は基壇中央の南寄り、すなわち大極殿の南から2間目に対応する位置に取り付くが、藤原宮大極殿については東門との関係からみて、北から2間目に取り付く公算が高い。

大極殿院の規模については、回廊の棟通り間で東西約118m（400尺）、南北約159m（540尺）とみる第117次調査

の所見に修正の必要はない。今回、推定復元した大極殿基壇の中心から東面回廊の棟通りまでの距離は58.66m（約200尺）であり、大極殿は大極殿院の東西幅の中心に正しく位置するとみてよい。

これに対して、大極殿と南門の心々距離は前述のように250尺と推定される。さらに、東門の中央の柱間をなす南から4基目の礎石据付穴から南面回廊の棟通りまでの距離73.72mは、小尺0.295mの250尺にほぼ符号しており、大極殿と東門は等しく南から250尺で割付けられたとみられる。いずれにしても、大極殿および東・西門は南北長540尺の大極殿院の中央ではなく、20尺南に配置されたことは間違いない。その理由は現状では判然としないが、250尺という整った計画値が見出されることから、大極殿の位置は藤原宮全体を中心でもある大極殿院南門心を基点に設定された蓋然性が高いといえよう。

5 おわりに

今回の測量調査により、藤原宮大極殿基壇には予想以上に後世の改変がおよんでいることがあきらかになった。しかしながら、戦前の古文化研の調査や第186次調査検出の階段痕跡との関係から、基壇のおおよその規模と構造を把握でき、同時に9間×4間とする大極殿の柱配置案の妥当性も追認できた。ただし、未だその全容を解明できたわけではなく、とりわけ大極殿本体については、古文化研がかつて西の妻柱にあてた2ヵ所の根石の評価、正確な柱間寸法や基壇外装の構造の把握、掘込地業の有無など、今後検討すべき課題も数多く残されている。これまで、藤原宮大極殿および平城宮第一次大極殿の規模は、その移築先と推定される恭仁宮大極殿の柱配置を参照して復元されてきたが、基壇外装の痕跡や多くの礎石据付穴が残る藤原宮大極殿では、その位置関係の再調査により厳密な規模や構造の復元が可能である。ここでの検討はその布石に過ぎない。（廣瀬 寛）

註

- 1) 足立 康・岸 熊吉『藤原宮址伝説地高殿の調査一』日本古文化研報告第二、1936。以下、古文化研の引用は同文献による。
- 2) 小澤 毅「平城宮中央区大極殿地域の建築平面について」『考古論集』潮見浩先生退官記念事業会、1993。
- 3) 前掲2) 論文。
- 4) 朝堂院での単位尺とされる0.292m（『紀要 2004』）では249.7尺の値が得られる。